

寶鏡三昧

如是之法、佛祖密附、汝今得之、宜能保護。
銀盃盛雪、明月藏鷺、類而不齊、混則知處。
意不在言、來機亦赴、動成窠臼、差落顧佇。
背觸共非、如大火聚、但形文彩、卽屬染污。
夜半正明、天曉不露、爲物作則、用拔諸苦。
雖非有爲、不是無語、如臨寶鏡、形影相覩。
汝是非渠、渠正是汝、如世嬰兒、五相完具。
不去不來、不起不住、婆婆和和、有句無句。
終不得物、語未正故、重離六爻、偏正回互。
疊而成三、變盡爲五、如荳艸味、如金剛杵。
正中妙挾、敲唱雙舉、通宗通途、挾帶挾路。
錯然則吉、不可犯忤、天真而妙、不屬迷悟。
因緣時節、寂然照著、細入無間、大絕方所。
毫忽之差、不應律呂、今有頓漸、緣立宗趣。
宗趣分矣、卽是規矩、宗通趣極、眞常流注。
外寂內搖、繫駒伏鼠、先聖悲之、爲法檀度。
隨其顛倒、以緇爲素、顛倒想滅、肯心自許。
要合古轍、請觀前古、佛道垂成、十劫觀樹。
如虎之缺、如馬之鼻、以有下劣、羃几珍御。
以有驚異、驚奴白牯、羿以巧力、射中百步。
箭鋒相值、巧力何預、木人方歌、石女起舞。
非情識到、寧容思慮、臣奉於君、子順於父。
不順不孝、不奉非輔、潛行密用、如愚如魯。
只能相續、名主中主。

如是の法、佛祖密に附す、汝今之を得たり、宜しく能く保護すべし。

銀盃に雪を盛り、明月に鷺を藏す、類して齊しからず、混ずるときんば處を知る。意言に在ざれば、來機亦赴く、動ずれば窠臼を成し、差ば顧佇に落つ。

背觸共に非なり、大火聚の如し、但文彩に形せば、即ち染汚に屬す。

夜半正明、天曉不露、物の爲に則と作る、用いて諸苦抜く。

有爲に非ずと雖も、是れ語無きにあらず、寶鏡に臨んで形影相觀るが如し。

汝是れ渠に非ず、渠正に是れ汝、世の嬰兒の五相完具するが如し。

不去不來、不起不住、婆婆和和、有句無句。

終に物を得ず、語未だ正しからざるが故に、重離六爻、偏正回互。

疊んで三と成り、變じ盡きて五と爲る、莖艸の味の如く、金剛の杵の如し。

正中妙挾、敲唱雙び舉ぐ、宗に通じ途に通ず、挾帶挾路。

錯然なるときんば吉なり、犯忤すべからず、天真にして妙なり、迷悟に屬せず。

因縁時節、寂然として照著す、細には無間に入り、大には方所を絶す。

毫忽の差、律呂に應ぜず、今頓漸有り、宗趣を立するに縁て。

宗趣分る、即ち是れ規矩なり、宗通じ趣極るも、眞常流注。

外寂に内搖くは、繋げる駒、伏せる鼠、先聖之を悲しんで、法の檀度と爲る。

其の顛倒に隨つて、縊を以て素と爲す、顛倒想滅すれば、肯心自ら許す。

古轍に合わんと要せば、請う前古を觀ぜよ、佛道を成ずるに垂として、十劫樹を觀ず。

虎の缺たるが如く、馬の鼻の如し、下劣有るを以て、羃几珍御。

驚異有るを以て、驚奴白牯、羿は巧力を以て、射て百歩に中つ。

箭鋒相値う、巧力何ぞ預らん、木人方に歌い、石女起て舞う。

情識の到るに非ず、寧ろ思慮を容れんや、臣は君に奉し、子は父に順ず。

順ぜざれば孝にあらず、奉せざれば輔に非ず、潜行密用は、愚の如く魯の如し。

只能く相續するを、主中の主と名く。